

小説1

過去問例題

オリジナル

ビートたけし「星の巣」
辻仁成「海峡の光」

過去問例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

頂上に着く。兄が望遠鏡を組み立て、スバルに合わせ始めた。ほくは、『季節の星座』という本を開いた。懐中電灯をつける。おうし座の肩にあたるスバルは今の季節は東の空にあると書いてあった。おうし座を探す。

スバルはすぐに見つかったが、角にあたる星が天の川にひっかかってわかににくい。

空に線を引いたつもりで探す。なぜ昔の人は牛だとか、蛇だとか思いついたのだろう。そんな風に見えたことはないし、星を線で結んでも形にはならない。角の星が見えないなら今夜はもうし座にしたっていいだろう。

「見えたぞ」

兄がスバルをつかまえたらしい。「ホラ」といつてかわつてくれる。

「いくつ見える？」

「一つ、二つ、三つ。うーん一五ぐらいかな」

目で見ると、スバルは六個ぐらい見える。この望遠鏡を使えば、二〇個ぐらいは見えるはずだ。

「兄ちゃん」

思わず、望遠鏡から目を離さず大きな声を出した。

流星だった。

兄が、黙りこくったまま地面にしゃがんで空を見上げている。

15

10

5

天の頂上あたりにカシオペアがあった。じっと見てみると、WがMに見える。そして、体重がふうっと消えていくように感じる。宇宙に二人だけ取り残されたようで急に不安になる。

不意に転校した学校のことを思い出した。東京から来たこと。言葉がちがうこと。なにかという「東京」とバカにされる。ほくが学校のヤツらはなんでも気に入らないらしい。

「俊夫、学校で友だちが出来たか？」

兄が出し抜けに訊いた。

「うん」といおうとしたが、急に訊かれたのでノドが詰まってなかなかいえない。なぜだか涙が出てきた。

「いじめられているのか？」

兄が重ねて訊いてくる。

鼻をグスグススンいわせながら、それでもなんとか「違う、違う」というと、よけい涙が出てきた。

「そのうち、友だち、出来るよ。仲間に入ろうとしなきゃ、だめだよ。誰か気の合いそうなヤツいいのよ。星を見るのが好きなヤツとか。この望遠鏡、学校に持っていったいいよ。友だちに見せてやって、おまえの知っている星の話、してやれよ。オレは、三年になったら天文部の部長になれていわれるんだ」

兄が笑いながらいった。

「天文部の部長！ すごいよ、兄ちゃん」

涙がとまった。

40

30

25

20

「もうすぐ、シリウスの季節だなあ」

兄が東の空を見る。

「シリウス、うん」

「来月になるとシリウスが東の空に顔を出す。砂漠のアラビヤ人はシリウスを『千の色の星』とも呼ぶんだ。見ている間に、青、白、緑、紫とプリズムみたいに色を変えるから」

「シリウスって一番明るい星だよ」

「そうさ。でも、直径は太陽の二倍しかない。地球からの距離が八・六光年で、日本から見える恒星では最も近いから明るく見えるんだ」

兄の力強い話し方はまるで死んだ父そっくりだ。

「八・六光年かあ」

八年前といえ、まだ父が生きているころだ。その時シリウスを出発した光がもうすぐ地球に届く。宇宙は巨大なアルバムだ。ほくらは宇宙の隅っこに取り残されているわけじゃない。ほくは、勇気を取りもどした。

(ビートたけし「星の巣」——立命館慶祥高改題)

55

50

45

問一——線1「宇宙に二人だけ取り残されたようで急に不安になる」とあるが、これと反対の思いを述べた、二十五字以上三十字以内の一文を本文中から抜き出し、そのはじめと終わりの五字を書きなさい。(句読点なども一字と数える。)

着眼点 「宇宙」という語句に注目する。

問二——線2「よけい涙が出てきた」とあるが、これを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 転校した学校での自分のつらい体験は、社交的な兄に話してもわかるはずもなく必死に体裁を保とうとする反面、兄の優しさに甘えてし

まいたい気持ちが強くなってきている様子。

イ 転校した学校での記憶は、兄と二人で星を見ているときにさえよみがえってくるようなひどいものだったが、広大な宇宙は自分の悲しみをいやしてくれるように思っている様子。

ウ 転校した学校で、不条理ないじめにあっていることを、兄には隠しておきたかったのに、兄は何もかも見抜いているようで、無理に明るく振る舞う必要はないと思っている様子。

エ 転校した学校で、自分が友だちも出来ずにいることを、兄には知られたくなかったのに、不意の質問に体裁を取り繕うことも出来ず、自分の意に反して涙が出てきている様子。

着眼点 「違う、違う」という発言から考える。

問三——線3「この望遠鏡、学校に持っていったいいよ」とあるが、このように言う兄の心情を説明した次の文の空欄に入れる語句として最も適するものを、本文中から、[A]は十字以内、[B]は三字で抜き出し、そのまま書きなさい。

・東京からの転校生である弟の俊夫が、学校で [A] ことを知って、学校で [B] ができるように、応援している。

着眼点 俊夫に対する、兄の最初の質問をふまえて考える。

問四——線4「宇宙は巨大なアルバムだ」とあるが、「俊夫」がこのように考えたのはなぜか。次の①・②の条件を満たして書きなさい。

① 段落はつけずに、全体を八十字以上百字以内で書くこと。

② 「父」「宇宙」という二つの語をどちらも用いること。(全体のどこに用いてもよい。)

着眼点 「アルバム」がどのようなものを意味するのかを考える。

オリジナル問題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一八年前に小学六年生だった「私」は、同級生の花井修が坂で倒れた老婆を見捨てて通り過ぎて行く姿を目撃した。「私」が目撃していたことを知ると、花井は青ざめた。学校での花井は優等生で人望も厚かったが、他人に認められなくていい子になろうとしていたのだとその時「私」は確信した。花井の残忍な苛めが始まったのはその翌日からだった。

5

かつて、私への苛めが激化した直後に、花井の後をつけたことがあった。人が見ていなければ彼の正義感などすぐに破綻し嘘が露呈するはずなのだから、後をつければ老婆を見捨てた時のようにいつか何かをしでかすはずであった。それを目撃し、今度こそはつきりとした弱みを握り花井を脅かせば、私は解放されるばかりではなく、運がよければ偽物の君主を逆に支配できるかもしれないと考えたのだ。

10

花井は私に尾行されているのも知らず、呑気に前を歩きつづけ、一方私は充分距離を取って、完璧な尾行を遂行した。花井の挙動が怪しくなったのは旧イギリス領事館の建物を過ぎた辺りからである。周辺に人の気配がないことを確認してから花井は一軒の空き家らしい古びた洋館の、立入禁止と大きく書かれた通用門の、僅かに開いた隙間から中へと侵入した。その瞬間私は彼が中でやらかそうとしている罪の大きさを想像しては、歓喜せずにはいられなかった。

15

立入禁止の四文字に私はほくそ笑み、そそくさと洋館へ足を踏み入れたのだが、果してそこで見たものは数匹の捨てられた子猫に餌を与える花井修の、それこそ少年らしさに溢れた姿だった。花井は給食のパンを靴から取り出すと、千切つては子猫たちに与えていた。そこには

20

と開けて存在していた。花井は猫を虐待しているのではなく、彼らを必死で生かそうとしていたのだ。それ以上そこにおいて彼の慈善を見せつけられるのは苦しく、退散しようとした。自分は学校であの猫たちが想像することのできないほどの酷い仕打ちを受けているのである。

ところが踵を返そうとした時、花井の所作に一点の曇りがあることを発見した。猫にパンを与えるその手に視線を集中させると、パンの描く放物線が次第に謎を解明していった。花井は明らかに一匹の猫にだけ餌を与えていたのだ。その子猫は他の子猫たちよりもずっと痩せていて、もう随分長いこと何も食べていないようなおぼつかない足取りであった。痩せた子猫が花井に寄りかかると、彼は背中を掴んで遠くへすつと放り投げた。そして他の元気な猫たちには、まるで痩せた子猫に見せつけるようにパンをあてがうのだった。子猫の迫った死が見える。数日後には餓死し、花井はそれを楽しむのだ。他の猫たちに餌を与え、子猫を彼らの見ている前で飢え死にさせる。何と花井らしい遊びだろう。死を弄ぶ花井の顔の信じられないほどの爽やかさ。私はその時花井の中に眠る悪神を見抜けた満足で欣喜「非常に喜ぶこと。」した。

35

学校中に言い触らすつもりでうきうきしながら家に戻った。翌朝、誰よりも先に登校し、黒板にその時の状況を仔細に書き記すことで彼に深い痛手を与えようとした。ところが眠ろうとすると、あの飢え死にしようとする子猫が頭の中に現れては訴えてくる。忘れようと試みるが、まどろむ度に悪夢にうなされ、私は、その子猫に餌を与えるために深夜家を抜け出すことになった。その日から、自分にそっくりな子猫を殺さないことが一つの意地となってしまった。

40

花井が子猫たちに餌を与え終わった後、私は洋館に忍び込み痩せた子猫にだけ餌を与えた。結局子猫は死なず、花井はいつまでも死なない子猫に業を煮やし、その他の猫たちにも餌を与えるのを止め、ついには立ち寄りなく

なってしまうのだ。花井はまたもや弱者を見捨てたわけだが、私は他の子猫たちをも見捨てられず、彼に代わってパンを届けつけることになった。

50

(辻仁成「海峡の光」)

問一 ― 線1「その瞬間私は彼が中でやらかそうとしている罪の大きさを想像しては、歓喜せずにはいられなかった」とあるが、それはなぜか。次の①②③の条件を満たして書きなさい。

- ① 段落はつけずに、全体を八十字以上百字以内で書くこと。
- ② 花井の正体について、わかりやすく説明すること。
- ③ 句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書くこと。(行の終わりや文末にきた句読点なども一マスに一字のみ書くこと。)

問二 本文中の□にあてはまるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 生 イ 死 ウ 善 エ 悪

問三 ― 線2「それ以上そこにおいて彼の慈善を見せつけられるのは苦しく、退散しようとした」とあるが、このときの「私」の心情を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 「私」に酷い仕打ちをする花井が、一方では子猫を生かそうとしている事実を直面し、「私」は花井の弱みを握って脅そうという考えが失敗に終わり、もうこの場にいる必要はないと悟った。

イ 「私」は花井からの苛めを逃れたい一心で尾行を遂行し、彼の弱みを握ろうとたくらんだが、花井は正体を現さず、立入禁止の洋館に入ったことだけでは花井を脅すのに不十分であると思った。

ウ 「私」は花井から酷い仕打ちを受けているのに、子猫たちは花井に

よって生かされているという事実を前にして、花井に情けがあることを知り、子猫以下に扱われている自分がみじめに思えた。

エ 「私」に酷い仕打ちをする花井の本性を見抜いているつもりでいたのに、子猫に接する花井の姿を見て、自分の洞察が誤っていたことと、花井との関係における自分の非を認めざるを得なかった。

問四 ― 線3「何と花井らしい遊びだろう」とあるが、これを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

- ア もうずいぶん長いこと何も食べていないようなおぼつかない足取りの子猫に餌を与えず、その死を弄ぶという無慈悲な行為。
- イ 痩せた子猫の前で他の子猫たちに餌を与え、その子猫を他の子猫たちの前で餓死させるという幾重にも酷い行為。
- ウ 同じように捨てられていた何匹かの子猫たちの中から、何の落ち度もない一匹だけを選んで餓死させるという残酷な行為。
- エ 痩せた子猫をただ餓死させるだけでは飽きたらずに、その子猫の背中を掴んで遠くへ放り投げるとい陰湿な行為。

問五 ― 線4「自分にそっくりな子猫」とあるが、このときの「私」の思いを説明した次の文章の□に入れる語句として最も適するものを、本文中から五字以上十字以内で抜き出し、そのまま書きなさい。

「□」によって、命を弄ばれている子猫の姿に、学校生活を思いのままだに操られている自分の姿を重ね合わせている。

小説3

過去問例題

オリジナル

辻内智貴「青空のルーレット」

やまだえいみ
山田詠美「ひよこの眼」

過去問例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

宝栄ビルサービスはビルの窓拭きと床清掃の会社で、従業員のほとんどが他にやりたいことを別を持っていくアルバイトだ。正社員の岸野は業務主任で、社長の弟の奥田は専務である。前日、仲間の保雄が作業中にビルの八階から転落して重傷を負った。

翌朝、宝栄ビルサービスの事務所には、五係の作業員全員が集っていた。早朝に掛かってきた会社からの電話で、呼び出されたものだった。その日の現場は、全て中止。奥田の指示によるものだった。

岸野は、すでに机についていて、やって来た俺達を見ると、ご苦労さんと小さく言った。俺達は、長椅子に腰かけたり、空いている社員の机の前に座ったり、たいして広くも無い事務所で思い思いに身を置きながら全員が揃うのを待った。保雄がとりあえず無事だった事で、俺達の気持は幾らか軽かった。何人かが小声で事故の話を交わしたりもしていた。やがて数が揃い、奥田が、俺達の前に立った。朝っぱらから、ダブルの背広を着込み、頭をボマードで光らせている、その姿が、俺にはまるで馬鹿に見えた。

「おまえらっ、なんで命綱をしないんだっ」

奥田の口から出た最初の言葉は、それだった。

俺は一瞬、ぼかん、としてしまった。多分、皆、そうだったろうと思う。言っている事は正当なものだろうが、こんな際の第一声がそれか、という気がした。

う言った。

「四十を過ぎた者にどうせ満足な作業が出来るとは思わんが、それでもそれなりのものを期待して会社は置いているのに、そういう、若い者の規則違反をたしなめる事の一つも出来んのなら、そんな者には居て貰う意味が無い」そして何の脈絡も無く、

「会社は大損だっ」そう続けた。

もういい加減、みんな、うんざりしていた。岸野の表情にも、それが出ていた。そろそろ復帰しそうだという社長の顔が、俺はひどく懐かしく思われ

たりした。

「いいかつ、仕事というのはなっ、小説なんかを書きながら」

と奥田が、また妙な事を言い始めた時、

「もう、いい」

と萩原さんが、声を上げた。

奥田の傍らの長椅子で、萩原さんは床に目を落し続けていた。

「……僕の落度は、あんたに言われるまでも無く、分っている。もう、いい」

押し殺す様な声で、そう続けた。

「なにお」

と火が点いた様な顔で、奥田は萩原さんを睨みつけた。

「萩原っ、お前、クビだっ、出て行けっ」

奥田は怒鳴った。

「仕事はな、おまえみたいな奴が、小説なんか書きながら、遊び半分でやれる事じゃ無いんだ、甘ったれるなっ」

そう声を張り上げた。

奥田に、人生観、などというものが、もし有ったとしたら、或いはその言葉に、それは辛うじて映っていたのかも知れない。

成程、そういう考えが有ってもいい。ただ奥田は一つだけ勘違いをしてい

結局、その朝、奥田が口にし続けた言葉は、すべてがその調子だった。曰く、労働基準監督署「労働者の保護に関して企業を監督する行政機関」からお叱りを受けた、曰く、同じ元請関連の現場はこの事故の為に引き揚げられてしまった。曰く、この一年何とか使わずに済んでいた労災「従業員の業務中のけがなどに対して企業が保険料を負担する保険」を使う破目になってしまった、要するに、「迷惑だ」、奥田の言いたいのは、ただそれだけの様だった。

1 (こんな奴が本当に居るのか) という気分では俺はそんな奥田を見ていた。

世の中には腹黒い奴は無数に居るだろうが、それでも、もう少しは表面を取り繕ってみせるものではないかと思っただ。何にせよ一人の従業員が重傷を負ったのだ。たとえ上辺だけでも作業員を労ってみせ、その上で注意を促し、裏で抜け目の無い締め付けを課る——普通は、まあそんな所では無いかと考えた。保雄の状態や、事故の状況説明や、その上での危険防止の為の確認や、本来会社側がすべきそんな話は、そこには何も無かった。有るのはただ、会社が出したものに對する奥田の騒がしい愚痴ばかりに過ぎなかった。

所詮小物なのだ、と思っただ。(ガキだ) とも思っただ。こいつは何十人かに一人くらいは必ず居る、胸クソの悪い、クソガキだ。そう思っただ。

奥田は俺達の前で尚も声を張り上げ続けた。そのうち、そうせずにおれないともいう様に、奥田の騒がしい愚痴は、同じ現場に居た萩原さん個人に、やがて向けられていった。愚痴は、次第に毒を含み始めていた。

「いい歳をした者が一緒に居ながら、どうしてこんな事になるのか、俺には分らん」

奥田は、傍らの長椅子に腰を下ろす萩原さんを視界の隅に置きながら、そ

る。窓拭きの会社など、所詮、奥田の言葉を無理に用いるなら、「遊び半分」

の「甘ったれた」奴等に依って成り立っているという事だ。小説を書きながら、ギターを弾きながら、マンガを描きながら、そうしながら現場へ出る者

たちに依って成り立っているという事だ。そしてもう一つ。もし奥田に聞く

耳が有るなら聞いて欲しい。俺達は決して「遊び半分」の「甘ったれた」気

分で仕事をしているつもりは無いという事だ。仕事は仕事として、ちゃんと

やっているという事だ。そして本当にやりたい事は本当にやりたい事として

本気でやっているという事だ。俺達の毎日は、決して、甘ったれた遊びなん

かじゃ無くて、不安や挫折がいやという程張り詰めた中を一本の綱を渡る様

にして生きているという事だ。希望や夢と引き換えに、それを引き受けて生

きているという事だ。それをおまえなんかはガタガタ言われたく無いって事

だ。舗装された広い道路にふんぞり返っている様な、おまえなんかは——

俺達は、恐らく初めて、目の前の奥田に強い怒りを覚えた。そして覚える

まま、誰もが怒りを押し殺した目で、奥田を見ていた。

「……そんな話、保雄の事故と、何の関係も、ねえじゃねえか」

誰もがムカついている沈黙の中で、その声を上げる者が居た。

緒方だった。

巨きな体をA曲げて、俺の隣に座っている。見ると目元が火照った様に紅い。緒方の昂ぶっている時の顔だ。

(あぶないな) と俺は思っただ。こいつが本気で殴ったりしたら奥田など粉々になっちまう。気味がいいにはいいが、それはそれで、また面倒な事になるに違いない。

(その時は止めなければ) 俺は少し緊張する思いで体を構えた。(止めて、俺が殴ってやろう) ……

奥田は、その緒方を、ジロリと見た。

「何だ、お前。いつか萩原に庇って貰った札のつもりか？ 書類にポタポタ

汚水を垂らしたのがお前だってことぐらいは分っているんだ、大目に見てやったのに、なんだ、その口のきき方はっ？」

それから奥田は、**B**「俺達みんなをねめまわして、こう続けた。」

「バンドだの、芝居だの、仕事が終わってそんなものをやってるから、現場で注意散漫になるんだ、事故なんか起こして会社に迷惑をかける事になるんだ、バンドだの、芝居だの、マンガだの、そんな奴は今までも数え切れないくらい居たがな、その中から一人でもプロの音楽家になった奴が居たか？ 役者でモノになった奴が居たか？ マンガで喰える様になった奴が居たか？」

「ひとりも居やしねえ、才能も無いくせに、夢なんて言葉で自分を甘やかして居るだらない奴等が、ただ居ただけだ、お前らもそうだ、歌手になるのだの、役者になるのだの、マンガ家になるのだの、そんなくだらない夢を見る前に人並の事をしろっ、お前らなんか要するに、世の中の落ちこぼれなんだっ」

ごつ、と鈍い音がして、奥田が突然、後ろの壁に吹き飛んだ。吹き飛んで、ゴン、と壁で顔を打ったと思うと、反動で前に跳ね返り、そのまま床に倒れて顔を打った。口もとに一筋の血が流れた。

長身の萩原さんが、その前に立っていた。息を荒くして、殴りつけた奥田を見下ろしていた。俺達は、声を失くしたまま、腰を浮かせて、萩原さんを見た。そして床に倒れた奥田を見た。奥田は低い呻き声を上げていた。

岸野が、萩原さんと奥田の間に入り、「萩原さん……」とその胸に両手をあてて、それ以上の行為を制した。

「人間はな」

岸野の肩越しに奥田を見据えて、萩原さんは言った。

「夢を見るから、人間なんだっ」そう言った。

「夢を叶える事よりも、夢を見る事で、人間は人間になれるんだっ、お前なんかに分かってたまるかっ」

115

110

105

100

95

震える声で、萩原さんは言った。その胸に手を当てながら、岸野が辛そうに、ひとつ目を落した。

(辻内智貴「青空のルーレット」——東海高改題)

問一 本文中の**A**・**B**に入れる語として、それぞれ最も適するものを次の中から一つずつ選び、記号に○をつけなさい。

ア 不快そうに イ 気色悪そうに ウ 面倒くさそうに
エ 窮屈そうに オ 堅苦しそうに

着眼点 前後の語句に注目する。

問二 線1「こんな奴が本当に居るのか」という気分では俺はそんな奥田を見ていた」とあるが、このときの「俺」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 従業員が重傷を負ったことに対して、会社のとるべき責任を説明したり、再発防止策を講じることもしないで、ただ大声で怒鳴るように話す奥田の腹黒さに反発する気持ち。

イ 保雄の怪我の具合や、事故が起こったときの状況説明を一切しないどころか、上辺を取り繕おうとせず、ただ「迷惑だ」ということばかりを一方的にしゃべり続ける奥田にあきれける気持ち。

ウ 命綱をつけることの重要性を論理的に話せないばかりか、重傷を負った保雄の状況や、事故の状況説明さえも出来ない、奥田の幼い子供のような態度に唖然とする気持ち。

エ 本来会社側がすべき、危険な作業についている従業員への労いの言葉や、事故を起こしてしまったことに関する謝罪の言葉を一言も口にしない奥田に対する腹立たしい気持ち。

着眼点 「こんな奴」がどのような人を意味するのかを考える。

問三 線2「押し殺す様な声で、そう続けた」とあるが、このときの萩原さんの様子を説明した次の文章の空欄に入れる語句として最も適するものを、**a**はこより前の本文中から二字で抜き出し、**b**は本文中の言葉を使って五字以内で書きなさい。

・保雄の転落事故については、自分にも**a**があると認めているが、事故とは無関係の**b**ことを非難してくる奥田に対してわき上がる怒りを抑えようとしている。

着眼点 ここまでの話の展開を理解する。

問四 線3「ただ奥田は一つだけ勘違いをしている」とはどういうことか。最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 他にやりたいことを持ちながらも、仕事は仕事としてやっている従業員がいてこそ、会社が成り立っているということを奥田は理解していないのだということ。

イ 「俺達」のような現場に出る者が、不安や挫折の張り詰めた危険な職場で、いかに仕事に対して本気で向き合っているのかを、奥田はわかっているということ。

ウ けして「遊び半分」の「甘ったれた」気持ちで仕事をしているわけではない「俺達」と違って、奥田は希望や夢を持つことの大切さを見落としているということ。

エ いろんな人生観があってもいいが、奥田は自分の人生観が、仕事以外にやりたいことを持っている「俺達」にも通用すると思ひこんでしまっているということ。

着眼点 奥田が言ったことに対して、「俺」がどのように考えたのかをおさえる。

問五 線4「俺は少し緊張する思いで体を構えた」とあるが、それはなぜか。六十字以内の一文で書きなさい。

着眼点 他の人の様子と「俺」の心情から考える。

問六 線5「震える声で、萩原さんは言った」とあるが、このときの萩原さんの様子はどのようなものだったか。萩原さんの考えがわかるように、次の①～③の条件を満たし、全体が百八十文字以上二百字以内の二文で書きなさい。

① 文末は「様子。」で終わること。これも全体の字数に入れること。
② 「夢」という語を用いること。(全体のどこに用いてもよい。)
③ 段落はつけないこと。句読点もそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書くこと。(行の終わりや文末にきた句読点なども一マスに一字のみ書くこと。)

着眼点 萩原さんの行動と言葉から考える。

問七 この文章について述べたものとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 登場人物の会話を実際の口語に近い表現で叙述したり、オノマトペを用いることにより、臨場感のある描写になっている。

イ 同じような文末表現を繰り返し使用することで、文章にテンポを持たせ、登場人物の心情を積み重ねるように表現している。

ウ 憎まれ役を登場させることで、登場人物の心情を自然に吐露させると同時に、「俺達」の人間関係も読者に知らせている。

エ 間接話をリズム良く並べることで、作者の主張を登場人物が代弁することに違和感が生じないようにしている。

着眼点 オノマトペとは擬態語と擬声語のこと。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その男子生徒の目を見た時、何故か懐しい気持ちに包まれたのだが、それがいったいどのような記憶から端を発しているのかが、私には咄嗟に思い出せなかった。私は、その時、まだ中学三年生だったし、その年齢で懐しがるべきことなど、ひとつもないように思えたから、せつない感情が霧のように胸を覆い、心を湿らせた時、私は驚き、そして混乱した。

彼、相沢幹生は、教壇に立ち、澄んだ瞳で、教室を見降ろしていた。私たちは、好奇心に溢れた様子で、その転校生を見詰めて、ひそひそと内緒話を続けていたが、彼は、まったく動じない様子で、担任の教師が自分を紹介するのを聞いていた。

「……というわけで、相沢は、きみたちと同じ場所で学ぶことになったわけだ。卒業までの短い間だが、どうか仲良くしてあげてくれたまえ。じゃ相沢、きみからも何か挨拶があるだろう」

教師は促すように彼を見た。けれど、彼は、ただ立ち尽くしているだけだった。緊張してしまっただろうかと、私は顔を上げて彼の顔を見た。ところがそうではなかった。彼は、落ち着いていた。そして、その澄んだ瞳をまばたきもせずに大きく見開いて何かを見ているようだった。何を見ていたのかは、まったく解らない。私には、彼が、空気中にある彼自身にしか見えないものを見詰めているように思えた。つまり、彼は、教師の言葉などまったく耳に入れていないのを明らかに周囲に解らせてしまう程に、上の空だったのだ。

教師は、顔を赤らめて、咳払いをした。

「おい、相沢、おい、聞いているのか!!」

彼は、ふと我に返ったように、怪訝な表情で、教師を見た。

「挨拶ぐらい出来んのか、おまえは」

彼は、小さく肩をすくめて、頭を下げた。私たちは、一斉に吹き出した。同じ年齢にしては、妙に超然とした雰囲気がおかしかった。私たちのほとんどが、担任教師を嫌っていたので、彼のような態度は、私たちの気に入った。教室の一番後ろに用意された席に、彼が歩いて行く時、私たちは、目配せを交わし合った。こうして、幹生は、私たちのクラスの一員になった。

幹生は、自分から、他の生徒と積極的に言葉を交わそうとはしなかったが、そのひょうひょうとした様子は、皆の気を引くのに充分だった。休み時間になると、何人かの男子生徒が彼のところに行き、彼を質問責めにした。そして、少し離れた場所で、女子生徒が彼らの会話に耳を傾けた。皆、季節はずれの転校生の秘密を知りたがっていた。けれど、幹生は、個人的な事情などは、上手い具合に、避けて言葉を選びながら会話を交わしていたので、私たちは、彼の前の学校でのことを少しばかり知るだけだった。

「結構、素敵だね、相沢くんて」

「大人っぽい気がする」

私と仲の良い女の子たちは、口々に、そんなことを囁いていた。転校生は、いつも見慣れた男子生徒たちより、どうしても格好良く見えるものだ。私はそんなふうにも思った。私は、むしろ、彼の瞳に遭遇した時のあの懐しい感情について考えていた。初めて出会う人間に対して、何故、そんな思いが心をよぎるのが不思議でならなかった。自分の内のつたない記憶を辿ってみるのだが、解決しなかった。まるで、解けない問題をひとつ抱えているような気分になり、私は、自分自身をもどかしく思った。

その日以来、私は、少しばかり苛立ちながら、毎日を送るようになった。

私は、授業中、あるいは休み時間、つまり学校にいる間は、ほとんど一日じゅう幹生を盗み見るようになった。もちろん、転校生の彼は、いつも、生徒たちの注目を集めていたが、私が彼を見詰めるのは好奇心からではなかった。

「うん、見える」

「困ったな」

私は、その不本意な噂を消し去るために、彼を見詰めるのを当分止めることにした。すると、かえって私の仕事はぎこちなくなってしまう、自分でも解る程に、冷汗をかいだ。幹生に出会ってから、数週間の内に、私は、自分が彼を盗み見るというのを習慣にしまったことに気が付いた。

授業中、幹生が指名されて立ち上がると、クラス中の生徒たちは、一斉に私を見るようになった。私には、彼らのこらえている笑いの気配を背中で感じる事が出来た。私は、彼らの思っていることが、間違っていることを悟らせるために平静を装おうとするのだが、そうしようとすればする程、顔は赤く染まり、冷汗が額に浮いた。私は泣きたい気分だった。どうして、こんなことになってしまったのだろう。私は、ただ、解けない問題の答えを探るように、私は、自分があまりにも無防備であったことに舌打ちをした気分だった。受験を控えた生徒たちにとって、恋の噂は、ちょうど手頃な気分転換法だったのだ。

それは、秋の学園祭についての話し合いが持たれた放課後のことだった。クラスの中から実行委員を男女各一名選出するために、クラス委員が候補をつのつていた。ある男子生徒が手を上げて言った。

「相沢と亜紀なんてどう？」

一斉に拍手が起った。私は、誰かがその悪い冗談を口にしないように、ずっと下を向いていたのだが、やはり、逃げようとすればする程、彼らは私の気持を探し当ててしまうのだ。

クラス委員は、少し困ったように言った。

「亜紀はいいけど、相沢くんは転校して来たばかりだし、どうでしょう?」

「でもさ、卒業までに、一個ぐらい思い出を作った方がいいぜ」

「そう、そう、二人は、息もぴったり合ってるし」

私は、どうしても、心の中のもどかしさを取り去りたかった。思い出そうとして、思い出せないものを抱える程、腹立たしいことはない。私は、時には、歯噛みをしたいくらいの気持ちで、幹生を見詰めた。

彼は、いつも上の空のように見えた。上の空という言い方は正しくないかもしれない。彼の瞳は、いつも真剣に何かを見詰めているようだったから。けれど、その何かは実在するものではないようだった。空気の間に、何か、彼にとつての重大なものが浮かんでいるかのようになり、彼は一点を見詰めているのだ。彼は、いったい何を見ているのだろう。私は、時折、彼の視線の方向に自分の焦点を合わせて見るのだが、もちろん、私の目には何も映らない。まばたきすらしない彼の瞳には、いつも、うつすらと涙の膜が張っている。

私は、それを見て、首を傾げずにはいられない。彼が、何かに関して真剣になっっているのは確かだと思うのだが。

「ねえ、亜紀、ちょっと聞いてもいい?」

親友の春子が、ある日、言いくそくに私に尋ねた。

「なあに?」

「あのさ、これ、皆が言ってるんだけど、あんた、相沢くんのこと好きになっただけじゃない?」

私は、驚いて、思わず自分の胸を指差した。

「私が!? どうして!?」

「だって、皆、あんたがいつも相沢くんのこと、ぼおっと見てるって言うてるよ」

「そんな……」

私は、困り切った表情を浮かべたまま、何と云って良いのか解らずに呆然としていた。私が彼を見詰めているのは事実だが、決して、彼に心を引かれたとか、そういう甘い気分ではないのだ。

「そういうんじゃないよ。でも、そんなふうに見えるの?」

皆、げらげらと無責任な様子で笑っていた。どうして、こんなことになってしまったのかと、私は、うつむいて、涙をこらえていた。何度も言うようだが、私は、ただ、幹生を見て、あの懐しさの原因を探し出そうとしていただけなのだ。

(山田詠美「ひよこの眼」)

問一——線1「教師は、顔を赤らめて、咳払いをした」とあるが、このときの教師の様子を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 幹生本人から挨拶をさせようと思ったのに、幹生は自分の言葉をまったく聞いておらずに、ただ立ち尽くしているだけだったので、幹生の注意を自分に向けようとしている。

イ 幹生本人から挨拶をさせようと思ったのに、幹生は澄んだ瞳をまばたきもせずに大きく見開いて何かを見ているだけで、挨拶をしようとなないので、幹生をたしなめている。

ウ 幹生が自分で挨拶をすると思ったのに、幹生は立ち尽くしているだけで、空気中にある彼にしか見えないものを見詰めているように思えたので、挨拶をするように促している。

エ 幹生が自分で挨拶をすると思ったのに、幹生は自分の言葉をまったく耳に入れていないのを明らかにわからせてしまう程に、上の空だったので、助け船を出そうとしている。

問二——線2「妙に超然とした雰囲気」とあるが、これと同じような意味で用いられている語句を、ここより前の本文中から十字以内で二か所抜き出し、そのまま書きなさい。

ウ 幹生の瞳にはうつすらと涙の膜が張っているように見えるうえに、彼の視線の方向に焦点を合わせても、彼が真剣になっているものがわからなかったから。

エ ほとんど一日じゅう幹生を盗み見ても、初めて幹生の目を見た時に、なぜ懐かしい感情を抱き、せつない感情が心を湿らせたのか、理由がわからなかったから。

問五——線5「私は、困り切った表情を浮かべたまま、何と言って良いのか解らずに呆然としていた」とあるが、このときの「私」の様子を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 幹生がいつも真剣に見詰めている何かは実在するものではなく、空気の間に、彼にとつての重大なものが浮かんできているのだということが、他の皆にも知られてしまったことに戸惑っている様子。

イ 解けない問題の答えを探るように、学校にいる間は、ほとんど一日じゅう幹生を見詰めて続けたことが、皆の誤解を招き、「私」が幹生を好きだという噂になってしまい、困惑している様子。

ウ 「私」は幹生に対して甘い気分など持っていないのに、幹生を盗み見ていたことが、クラスの皆には、「私」が幹生を好きだとうつり、下らない噂になっていることにつけにとられている様子。

エ 「私」が学校にいる間は、ほとんど一日じゅう幹生を盗み見ていることが、「私」が幹生を好きだという間違った解釈をされ、親友の春子が教えてくれるまで知らずにいた自分にあきれている様子。

105

問三——線3「もちろん、転校生の彼は、いつも、生徒たちの注目を集めていたが、私が彼を見詰めるのは好奇心からではなかった」とあるが、「私」はなぜ幹生を見詰めているのか。その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 幹生の瞳は、いつも空中の一点を真剣に見詰めているが、それが実在するものではないように思われ、その実在するものではない何かとはいったい何であるかを探り当てたかったから。

イ まばたきもせずに大きく見開いた幹生の澄んだ瞳が、何を見詰めているのかかわからず、自分の心の中に生じたもどかしさを取り去りたかったから。

ウ 自分の心にもどかしさをもたらしている、幹生の瞳に初めて遭遇した時に感じた懐かしい気持ちとせつない感情が、どのような体験から発生したものであるかを思い出したかったから。

エ うつすらと瞳に涙の膜を張りながらも、まばたきもせず、つねに、何かを真剣に見詰めている幹生が、何を考えているのかを知りたかったから。

問四——線4「私は、それを見て、首を傾げずにはいられない」とあるが、その理由を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 幹生の瞳に遭遇した時の感情について考えてみても、なぜ初めて出会う人間に対して懐かしさが自分の心をよぎったのかという疑問が、解決しなかったから。

イ 幹生のひょうひょうとした様子はクラスの皆の気を引くのに充分だったのに、幹生は自分から積極的に言葉を交わそうとはせず、いつも上の空のように見えたから。

問六 本文中の□には「私」の思いを表す言葉が入るが、それはどのようなものと考えられるか。本文中の内容に即して、次の①～③の条件を満たし、二十字以内で書きなさい。

① 「のに。」で終わること。これらも全体の字数に入れること。

② □の前の「私は、」のように、「」につづく形で書くこと。

③ 句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書くこと。

問七 この文章について述べたものとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 「私」が幹生の目に懐かしい感情を抱いた理由を明らかにしようとするにつれて、クラスメイトに幹生に対する感情を誤解されていく様子が、「私」の心情とともに、丁寧に描写されている。

イ 「私」の日常的な空間に転校生という「異者」を登場させる構成であり、本文は、それを中学生のころに体験した出来事として、「私」が回想する形式で書かれている。

ウ なぜ「私」が幹生の目を初めて見た時に懐かしい気持ちを抱いたのかという謎を冒頭で提示し、その懐かしさを解き明かそうとしながら話を展開させていくという手法がとられている。

エ 語り手の「私」は、自己の心情を何度も自分自身で分析している。「私」は、転校生の幹生の「目」や「瞳」の様子を丁寧に描写すると同時に、あらゆる登場人物の動作や内面も細やかに叙述している。